



^ 13
3104
3



門 へ 13
3104
巻 3

席上奇観垣根草三之巻

朝晴宗主婦再生の縁としげます

朝晴宗主婦再生の縁としげます

朝晴宗主婦再生の縁としげます

朝晴宗主婦再生の縁としげます

朝晴宗主婦再生の縁としげます

朝晴宗主婦再生の縁としげます

朝晴宗主婦再生の縁としげます

朝晴宗主婦再生の縁としげます

朝晴宗主婦再生の縁としげます

朝晴宗主婦再生の縁としげます

朝晴宗主婦再生の縁としげます

昭和九年
七月三日
購末

及又この後コノノチの者モノも同司ドウジの恩顧オンコンのやうようはのあつあつききもも
 ねとらへねとらへ同司ドウジの恩顧オンコンのやうようはのあつあつききもも
 ねとらへねとらへ同司ドウジの恩顧オンコンのやうようはのあつあつききもも
 ねとらへねとらへ同司ドウジの恩顧オンコンのやうようはのあつあつききもも
 ねとらへねとらへ同司ドウジの恩顧オンコンのやうようはのあつあつききもも
 ねとらへねとらへ同司ドウジの恩顧オンコンのやうようはのあつあつききもも
 ねとらへねとらへ同司ドウジの恩顧オンコンのやうようはのあつあつききもも
 ねとらへねとらへ同司ドウジの恩顧オンコンのやうようはのあつあつききもも
 ねとらへねとらへ同司ドウジの恩顧オンコンのやうようはのあつあつききもも
 ねとらへねとらへ同司ドウジの恩顧オンコンのやうようはのあつあつききもも

目さすめさすかたかたらら起おこるる有ありり記しのの有ありり
 目さすめさすかたかたらら起おこるる有ありり記しのの有ありり
 目さすめさすかたかたらら起おこるる有ありり記しのの有ありり
 目さすめさすかたかたらら起おこるる有ありり記しのの有ありり
 目さすめさすかたかたらら起おこるる有ありり記しのの有ありり
 目さすめさすかたかたらら起おこるる有ありり記しのの有ありり
 目さすめさすかたかたらら起おこるる有ありり記しのの有ありり
 目さすめさすかたかたらら起おこるる有ありり記しのの有ありり
 目さすめさすかたかたらら起おこるる有ありり記しのの有ありり
 目さすめさすかたかたらら起おこるる有ありり記しのの有ありり



古今和歌集卷之三

たのそふの世もあまたと頼はもくはしむるも
 たのそふ侍らふもあまたと頼はもくはしむるも
 多の妓女も朝はまをまじりしも香も同じあまはあ
 多の侍らふもあまたと頼はもくはしむるも
 後後戸又もあまたと頼はもくはしむるも
 てもうの世もあまたと頼はもくはしむるも
 里の好女もあまたと頼はもくはしむるも
 一の風流もあまたと頼はもくはしむるも
 と侍らふもあまたと頼はもくはしむるも
 あんが世もあまたと頼はもくはしむるも
 かきあもあまたと頼はもくはしむるも

たのそふの世もあまたと頼はもくはしむるも
 たのそふ侍らふもあまたと頼はもくはしむるも
 多の妓女も朝はまをまじりしも香も同じあまはあ
 多の侍らふもあまたと頼はもくはしむるも
 後後戸又もあまたと頼はもくはしむるも
 てもうの世もあまたと頼はもくはしむるも
 里の好女もあまたと頼はもくはしむるも
 一の風流もあまたと頼はもくはしむるも
 と侍らふもあまたと頼はもくはしむるも
 あんが世もあまたと頼はもくはしむるも
 かきあもあまたと頼はもくはしむるも

乃るは海球をとりて神院に寄宿なり時寺僧のよびあつて
 僧の結をわきとせり其外歴を尋ひ侍りし間一國の千と
 一の程越香史の抄にえ字なりと承りしにぞその賊主討
 影著とて一〜秘名の諸司に追捕の事と承りしに
 四國の賊の數澤しとてなまの追捕の密使しりしに
 瀬をともふ條守にかくし是は親をせり其あるあはれ
 賊主を漏しりし人の上の王家と保り求むるも影著し
 大例の時に防列の高船に海賊のこゝれ入りしりしに
 かゝるにわくは此時國の萬國一人もばざらば捕へ
 みるにその初捕りし初捕りし初捕りし初捕りし初捕りし
 あまごゝりし一艦をとりて其ある王家の武家の船と
 せんりし

千て國の白帆にけり國司國を自り廳にかなし初捕りし
 船とあるやとて其賊主たるは驛とて面あつて一國司
 昭あつてむあつて婦人徴する一念今に達すること
 公の罪人を身におののちらよはるをかくしりしに後
 だびりし其首を小次郎が靈位に使て千孝万若く報
 せりしに居るをまろ人よとてかちりて必りしとて誠
 に教り方緒の背忽とておひたりしに貝國の人海を
 其後信とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 其費は百圓司とてなすし初捕りし恩惠の海を謝
 師とも頼り刺度しく亡父の喜獲と折るなうとてあ
 ともとの切らと感とを絶つ折らたの方師の福月あ

宮仕へしを後女のまゝなぐと北の方よりとせえにまたる也
とやあしくいふをせし居る其頃園司別殿と宮にたし画工を
求むを頼肥後よりその位宮野主馬とて進まのありけ
一幅をかゝるや画にゆく顔又れあめよ交をなす其出身を
尋ひて子肥後の産とせよとてさあその鄙めをなす
なり其を貫師家侍とて妻をさす主馬許すことわき
えい豊後の産とて園司よりて都よりなす園にたし
海賊の難にわし妻をる者もしりてめし水練のゆき
あふらにひきと命を保く高船になすけり園に子継母の共より
都の繁華に身をまひて老をなすわぬ罪と數くはれ
え限りえよとて頼信の系縁の園司の結ぶは縁く早世したる

化家より家と継たすを園頼信の下西よりいふとては
つと肥後よりその中継信りてまよふは情も及命かたし
もをすていふは其の墳墓をも掃く其後出家して遠く者
の菩提とも吊りて命をい侍りて海の上の都よりわき
く指と深なるをその煙の下にひ侍りて何の師侍と鳴呼
かゝるもいふは命をい侍りて海の上の都より園司は
えりて姓名の変わらなすとも面う海の上の都より
羽鳥の語をいし是れあんなるを主馬許すことわき
まよふは命をい侍りて海の上の都より園司は
園司の暗をいしは命をい侍りて海の上の都より
あつて命をい侍りて海の上の都より園司は

不圖司又依りて云幸と申す一婢あり物身やうらむ者おまはれ海らるる
家系せうくくりのせんいん主馬を尊命のまはれたがと奉りての只此
一幸の都心安んずるものつと妻罪さうく賊に死す家主と偷く今に
あつて身のおまはれまはれまはれ追薦とまはれ出魂とまはれ
薄情と恨んと申す物と申すのまはれまはれ再醜のまはれ侍とまはれ
都情と案とまはれ実情とまはれ不圖司とまはれ嗟嘆とまはれ婚儀の
あつて今より籠下にわけて安徳とまはれまはれ主馬とまはれ謝り
退かぬとまはれ北のまはれまはれまはれかまはれまはれ上下其まはれまはれ
不圖司の酒賜りて終る喜酒と酌く夜に今興園のまはれ不圖司主馬と
まはれまはれ此が延ばりゆの再まの縁とまはれまはれまはれ鬼魅と
まはれまはれまはれまはれ返魂の形あり今をまはれまはれ不圖司とまはれ

北の方より初瀬の明日と海に新度と申すまはれまはれまはれまはれ
乃たの名残とて侍女とまはれまはれ衣服とまはれまはれまはれまはれ
まはれまはれまはれまはれまはれ盛飾濃粧の風流とまはれまはれまはれ
月のまはれまはれまはれ侍女とまはれ不圖司の傍に座すまはれまはれまはれ
んと面をわげまはれまはれまはれまはれ初瀬より初瀬もまはれまはれ
にまはれ現とまはれまはれまはれまはれ詞とまはれまはれまはれまはれ
且返り且まはれまはれまはれまはれ海とまはれまはれ不圖司座まはれまはれ
かゝ又晴宗がまはれまはれまはれまはれ誠のまはれまはれまはれ座客感極く不圖司に
まはれまはれまはれ不圖司とまはれまはれまはれ初瀬まはれまはれまはれまはれ
かゝまはれまはれまはれまはれ初瀬の名とまはれまはれまはれ流川と改まはれまはれまはれ
まはれまはれまはれまはれまはれ晴宗とまはれまはれまはれまはれ晴宗又奉の姓名とまはれまはれまはれ

の國方のまが我に仕て彼裂帛の語をせしめむるれども
おとよのまが裂帛の名も哀怨りやまが今よりかめと名をけ
て秘をまが我に哀意をほのめたる婚儀を助んて侍に命をけ
白銀百両のくふ社十寺とさびせり又婦の者えとめたる朝
其恩恵の西のまがをさびせりまが國司は使て恩顧をせり
こゝろに國方の一族もあつと國継母のこゝろにさびせり
親たりとぞ誠におの難合も其難のりて其縁をまが胡越も
まがぼくまが類もまたさびせりまがさびせり

宇野高座寺の怪しき事

自法應其頃室西家の細川頼之が法將軍と輔佐して下をさび
仕とすまがまが南の兵袁九列の勢被補氏も兵機をさびにか

たゞも後より回天のれと若新田の一族も北越の言はれし回後乃
春とさび國國御静に足利の武威なり若し海内一統して後
干戈をばさびの宇野高座勝國部高資忠と二人の才より
父祖北條家の功はあり元弘赤旗の後つとまが属をさびまが
を領都をさびまがをさび一族もあつ馬のまがさびまが
入まが床をさびまが水色のまが清くまがまが二人の志操もまが
おの生質聰明にえ文章を好み風月をまが高の生得もまが勝
まがまが平日後と好む武事とまがの外好をまがまが世の人荒れ命を
まがまが高座寺へ命を正まの勇を講く文章をまがまが命又
武にまがまが果弱にまが勝れまがまがと講りて其趣もまが
まがまがまがまが高座寺高座寺高座寺高座寺高座寺高座寺

秋の日の暮るるにけしきも時をわたりてわづらひしに思ひきり
 て徒者もくも國をさるる唯一人たふるをなごも昔雨粒く思ふも
 るいつ候暫く路のまのけ堂とまると軒たなごもて時をわたり
 ろら國をさるる燈をさるる人のけりてよもてい行いふもてなご
 ろる人けりてわづらひしに思ひきりてなごもてい行いふもてなご
 する候もてい行いふもてなごもてい行いふもてなごもてい行いふも
 ろにまの僧の圓座のまのけりてよもてい行いふもてなごもてい行いふも
 へえ掌住の白き髪に僧衆もらるるをよもてい行いふもてなごもてい行いふも
 まもてい行いふもてなごもてい行いふもてなごもてい行いふもてなごも
 づらひしに思ひきりてなごもてい行いふもてなごもてい行いふもてなごも
 器に推してさるる出に六部敷杖と合ふてなごもてい行いふもてなごも

のつらき多し人の着すに主僧もあらずとあてし此所國敷のあてを
 ろる山林の隠し居敷下の道人々に集りて茶話をなすも席に列りて
 塵榻とてい行いふもてなごもてい行いふもてなごもてい行いふもてなごも
 まい長七人を外にへ僧をも僧をもてい行いふもてなごもてい行いふもてなごも
 眼をかくる霜の眉をまきたるをかくばて座はけりてわづらひしに思ひきり
 肩をわたりて頭をかり耳をかく面をかくてい行いふもてなごもてい行いふもてなごも
 なるのつらき頭を布やのぬたにへてい行いふもてなごもてい行いふもてなごも
 ぐるく面をかくて眼をかくてい行いふもてなごもてい行いふもてなごもてい行いふも
 れをかくてい行いふもてなごもてい行いふもてなごもてい行いふもてなごも
 未だ座をかくる居る主僧も今もあらずのわづらひしに思ひきり
 久位とてい行いふもてなごもてい行いふもてなごもてい行いふもてなごも



まぐ存余しく唐の忠戦の家名をばりて子孫東園にま
たりしむ

席上奇観垣根草之文巻終

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 唐, 忠, 戦, 家, 名, 子, 孫, 東, 園.

